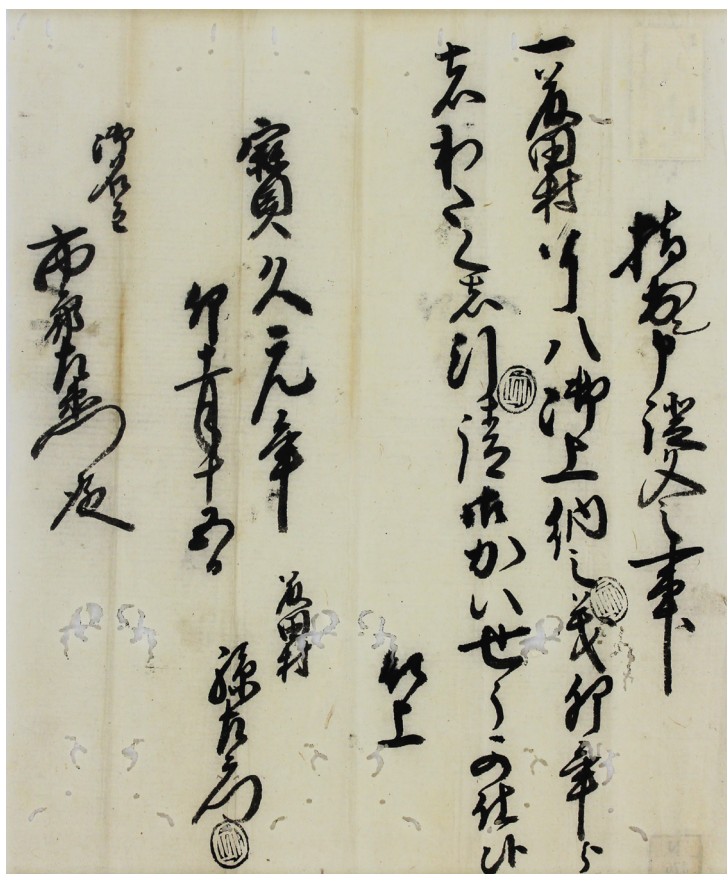


福島県史料情報

第61号 令和3年(2021)10月



宝久(寶久)元年卯11月15日付「指出し申證文之事」(二文字屋文書 376)

私年号「宝久」使用例の発見

「私年号」とは、私に創作され使われた年号である。使用例は中世に多く、朝廷の制定した公年号(元号)を否定し、社会集団の繁栄といった願意や、対立姿勢の明示、除災招福などのため用いられた。近世では、初期の大道・正中・慶喜、後期の久宝・永長・元暦、幕末期の亀光・長徳・神治・天晴などが確認されているが、ここに新たな私年号を示したい。

上の史料は、伊達郡藤田村(現国見町)の孫左衛門が同村名主の市郎左衛門に提出した証文で、この年の藤田村の字八に賦課された年貢について、孫左衛門が引き受けて皆済すると約している。日付は「宝久(寶久)元年卯十一月十五日」とあり、公年号に存在しない私年号である。藤田村関連の史料によれば、市郎左衛門の名主在任期間は安永七年〜天明四年(一七七八〜一七八四)であり、本書の卯年の記載から、宝久の建元年次は天明三年と判断される。

信達地方の人々にとって、天明三年は変事が重なり、天明の大飢饉が本格化した年であった。正月四日に三つの太陽(幻日)を目撃、五月〜八月は多雨・低温傾向、七月の浅間山噴火により降灰、八月出羽国に龍が出現と噂し、秋は大凶作、冬に大飢饉となり訴願・騒動が頻発、十一月諸国に疫病蔓延、破産・餓死が相次ぎ、本書の孫左衛門も翌十二月に家屋敷・田畑を手放した。未曾有の危機に直面し、除災招福を期待する中、尊さや恵みを意味する「宝」と繁栄を願う「久」による私年号が発生したのである。

私年号は近世の社会体制確立で姿を消していき、体制崩壊の過程で蘇り増えていく。とすると、宝久は近世中期の貴重な事例であるばかりか、社会不安の高まりや体制崩壊の予兆を表しているといえる。ただし、宝久の創作者や、宝久を私年号と自覚して使ったのかについては検討を要する。(小野孝太郎)

書き換えられた いわき地方の名産品

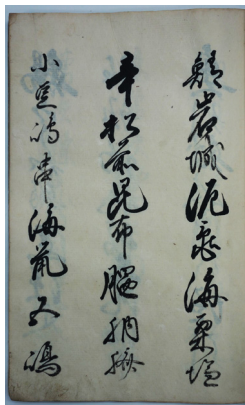
江戸時代に寺子屋などで使用された教科書の一つに『自遣往来』がある。別名『江戸往来』とも呼ばれ、江戸城内における儀式や江戸で流通する国内外の名産品、江戸の地理が書き上げられている。

本書は、寛文九年(一六六九)の初板刊行以来、いくども再板され、写本も含めて全国で用いられた。当館にも、伊達郡掛田村(現・伊達市霊山地区)の旧家に伝わる写本(『自遣往来』今村文直家文書一〇)が收藏されている。

こうした写本の文章は、当然のことながら底本となった板本と同じはずである。しかし、人間が書き写す以上、間違いは避けられない。今村家本についても、いくつかの誤記が存在する。

なかでも興味深いのは、江戸で珍重される全国の水産物を紹介した部分で、「能登鰯、岩城泥亀、海栗塩辛、松前昆布、鰻、小豆嶋串海鼠、五嶋鰯」と「泥亀」(スッポン)がいわき地方の名産品として紹介されている。しかし、板本を見ると、「泥亀」の箇所は実は「浮亀」となっているのである。

「浮亀」とはマンボウのことです。



『自遣往来』
(今村文直家文書 10)

本紙第四十七号掲載の渡邊智裕「佐竹永海が描いた磐城産のマンボウ」によると、江戸時代には常磐沖の特産物として広く知られ、平藩や湯長谷藩から将軍・幕閣への献上品・贈答品として評判であったという。

つまり、この誤記は単なる書き間違いというよりも、写本を作った人物が「浮亀」を知らず、そのままでは意味が通じないため、同じ部首(サズイ)の「泥亀」のことだと勘違いをして書き換えた可能性がある。

あるいは、実際に「泥亀」と記載された板本が存在し、それを写したとも考えられる。その場合にはそうした板本が、いつ頃から登場したのか気になるのである。

いずれにしても、本書を教科書として使用した江戸時代の霊山地区の子供たちは、マンボウではなくスッポンをいわき地方の名産品として学習したことになる。誤記がもたらした地域イメージの改変という大袈裟であるが、写本を地域史料として分析する際のひとつの切り口となるのではなからうか。(山田 英明)

会津郡田子倉村 皆川家と「農諭」

江戸時代、会津郡田子倉村(現只見町)名主と口留番所番人を務めた

皆川家に「農諭」の写本が伝わっている。農諭は、下野国黒羽藩士の鈴木武助正長(号を為蝶軒)の著作で、飢饉に関する教訓書である。農政家の鈴木は家老を務めて善政を敷き、天明の大飢饉で被害を出さなかったとされ、最晩年に農諭を著した。本書の目録には、飢饉憂之事・度々の年数之事・餓死人之事・天災地變之事・長しけ不作之事・穀物高直之事・乞食出倒死之事・かてを貯へし人之事・金を持し人うへ死之事・農業全書を可讀事の十章があり、享保・天明の大飢饉の惨状・実態や、飢饉への備えの重要性などを説いている。

書誌事項に注目すると、書名は原外題「饑饉農諭傳記全」、目録題「飢饉用心農諭」、尾題「農諭傳記」。成立は、奥書に「文化二年(一八〇五)乙丑八月廿四日誌」とあり、序欠。文化九年仲春、黒羽藩の長坂政右衛門安利跋。跋には、鈴木が文化二年秋に農諭を著すも、翌年正月晦日に病で亡くなり、志を継いだ長坂らが鈴木木の七回忌に農諭を出版したとある。また、識語によれば、文政二年(一八一九)十一月十七日、塩谷郡

の坪山仲右衛門宅で、長坂跋を載せた版本ないし写本が書写され、それを基にして、天保九年(一八三八)二月に皆川喜右衛門頭恒が書写したものが本書である。

なお、本書には明確な追記があり、かつての飢饉を列記した箇所に、天保の大飢饉時の状況が加筆されている。天保九年秋の記述から、皆川氏が書写の最中及び書写後に加筆したとみられ、天保四・六・七年の飢饉や米価高騰などを記している。

農諭は改版・再版を重ねて全国各地に広まったが、長坂跋は初版本に付されたとされており、この点で本書は写本ながら貴重な農諭といえる。また、皆川氏の加筆は僅かなものだが、大飢饉の実情を遺そうとしたものであり、農諭の著者鈴木木の教訓が、皆川氏に受け継がれていた点も注目値する。(小野 孝太郎)



『饑饉農諭傳記全』(飢饉憂之事・度々の年数之事と加筆部分、皆川欣也家文書 1257)

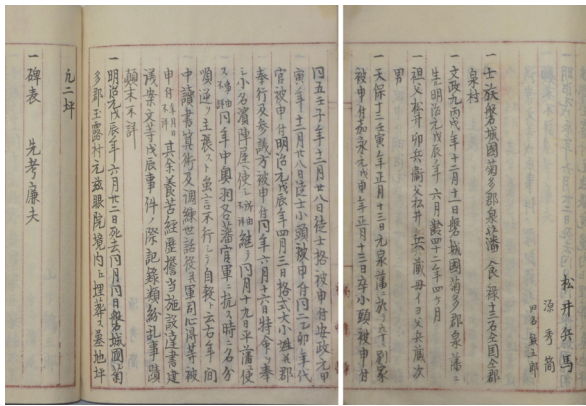
官修墳墓に葬られた

泉藩士松井兵馬

当館の官修墳墓に関する行政文書には、戊辰戦争の戦闘がどの地域で激しかったのか、また西軍に動員されて亡くなった軍夫・農兵など地域住民も記載されており、戊辰戦争時の地域の重層的様相を示している。

左は、官修墳墓に葬られた人々の情報を明治十二年(一八七九)に福島県で整理した簿冊である。この中には、幕府方の藩であった泉藩の武士松井兵馬の名も記されている。

松井兵馬は源秀簡と称し、旧名は鉄五郎、十三石取りの泉藩士であった。文政九年(二八二六)十二月



松井兵馬の履歴(明治12年(1879)作成『殉国者履歴調』、明治・大正期の福島県庁文書 1706)

十一日に泉藩で松井家の次男として生まれ、父は兵蔵、母はイヨ、祖父は卯兵衛。天保十三年(二八四二)正月十三日に卒となつて別家を申し付けられ、弘化五年(一八四八)正月十三日に卒小頭となった。嘉永五年(一八五二)十二月二十八日に徒士格となり、安政元年(二八五四)十二月二十八日に徒士小頭、翌二年に代官に任命された。慶応四年(二八六八)四月三日、格式大小姓并郡奉行及参議方に就いた。

西軍が平潟(茨城県北茨城市)へ上陸した六月十六日に泉藩より特命を奉じて小名浜陣屋へ遣わされ、十九日には磐城平藩へ派遣されたのである。しかし、名分の順逆を主張した建言は容れられず、二十二日に郭外の鹿島神社境内で自死し、菊多郡玉露村の茲眼院(いわき市泉町玉露字道上三六、廃仏毀釈のため廃寺、現子安観音堂)境内に埋葬された。四十二歳四ヶ月であった。墓地の坪数は凡そ二坪。石碑の建設人は長男の松井秀惇、その表には「先考廉夫」と刻まれており、潔い武士である兵馬に相応しいものであった。

なお、他の史料では、碑文が「大考廉夫松井君墓」となっている。兵馬の死から六日後の二十八日には、彼による和平への努力も空しく泉城は西軍によって占領されるに至ったのである。

(渡邊 智裕)

明治開拓村

安積郡桑野村の盛衰

明治九年(一八七六)に立村された安積郡桑野村は、安積開拓発祥の地であり、郡山市の今日の発展の礎となった村として知られている。

同村域はもともと大槻原と呼ばれる原野であったが、明治維新後に福島県によって開拓が始められた。その過程で擬洋風建築の開成館(開拓事務所兼区会所のち郡役所、現・郡山市開成館)や遥拝所(現・開成山大神宮)が建設されており、そうした輝かしい歩みについては、福島県勸業課が作成した『桑野村開拓事業誌』(明治・大正期の福島県庁文書 二七一〇)に詳しい。

その後、国営安積開拓事業が始まると、全国から土族の移住が進み、安積疏水事業の進展と相まって、発展を遂げたことは有名であるが、さらにそれ以降の歴史については語られる機会に乏しく、桑野村が貧村として苦しみ、大正十四年(一九二五)に廃村となったことを知る人は少ないのではなからうか。

桑野村にとって転機となったのは、皮肉にも安積疏水事業が一応の完成をみて、盛大な通水式が行なわれた明治十五年のことであった。この年、桑野村誕生以前は安積郡の中

心地であった郡山村の熱心な運動により郡役所が郡山村に移転し、翌十六年には県勸業課出張所が役所を終えて廃止となり、同十七年にも農商務省疏水掛出張所が村を離れた。

その後、郡山村が町に昇格し、安積郡の中心地としての威勢を取り戻すのと対照的に、桑野村は衰退をしていく。入植者の中には土地を手放して離村する者もあり、村人の多くは郡山町の地主の小作人や郡山町の工場で働く労働者に甘んじた。

県が大正八年に行なった調査では、村民は「所謂開墾者ニ属スルヲ以テ資金潤澤ナラサル関係ヨリ民裕甚タ裕カナラス、之ヲ以テ土地ニ関スル村税ハ地租付加税ヲ徴セス」(『町村巡視復命』同一〇四五)という惨状であった。

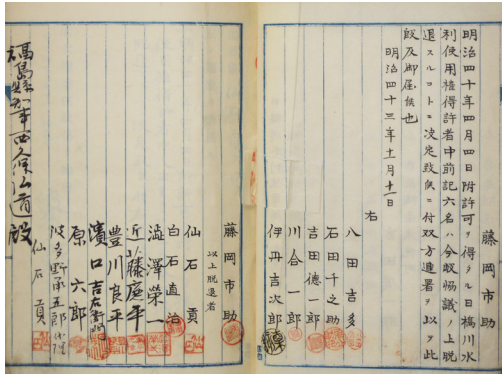
そのような折、郡山町が隣接する桑野村と小原田村を吸収して市に昇格しようとする運動を始めた。桑野村の人々は、一旦はこれを拒否したものの、最終的には合併する道を選び、開拓村の歴史に幕を閉じたのであった。

(山田 英明)



『桑野村開拓事業誌』(明治・大正期の福島県庁文書 2710)

日橋川水系の 水力発電事業と渋沢栄一



明治43年(1910)11月11日付日橋川
水利使用得許者異動届(部分、『水利使用』、
明治・大正期の福島県庁文書2150)

明治四十年(一九〇七)四月四日、福島県知事平岡定太郎(三島由紀夫祖父)は石田千之助・井出百太郎・吉田徳一郎・川合一郎・林松次郎・藤岡市助・石川清静・伊丹吉次郎・八田吉多など九名の実業家や技術者に対し、福島県耶麻郡磐梯村大字大谷字打越(磐梯町大谷)並びに駒形村大字金橋切立山下(喜多方市塩川町金橋)地内での発電用水車建設及び水路の新設を許可する命令書を下付した。この九名は東北電力株式会社の創立発起人で、八田は地元の河沼郡日橋村字八田(会津若松市河東町八田)の地域名望家であった。

また、同年四月十九日には、福島

県知事平岡定太郎は八田吉多・佐治幸平・石田千之助・伊丹吉次郎・吉田徳一郎など五名の実業家や技術者に対して、河沼郡日橋村字八田地内で日橋川の水力を利用した発電所四基の設置を許可したのである。この五名は日本水力電気株式会社創立発起人でもあり、地元の八田の他には佐治幸平が若松市徒ノ町(会津若松市徒之町)の政治家であった。

降って明治四十三年十一月十日には、新たに渋沢栄一・近藤廉平・豊川良平・濱口吉右衛門・原六郎・波多野承五郎代理仙石貢など東京在住の実業家六名が日橋川の水力を利用した発電事業に参加することになった。翌十一日には、日橋川水利使用権得許者に関する今般の協議で、当初からの八田・石田・吉田・川合・伊丹・藤岡の六名が脱退することになり、双方連署の上で福島県知事西久保弘道へ異動届が提出されたのである(上掲図)。これにより大幅な経営陣の交替がなされ、会津における水力発電事業の転換点となった。

翌明治四十四年十月三十日には、三井や三菱の資本を背景に渋沢栄一は、豊川良平・仙石貢・原六郎などとともに猪苗代水力電気株式会社の創立総会を開いた。しかし、この会社は大正十二年(一九二三)四月一日には東京電灯株式会社に合併されたのである。

(渡邊 智裕)

令和三年度行事予定

(令和三年十月～令和四年三月)

一、展示公開(収蔵資料展)

只見線復旧応援「奥会津の古文書―只見町石伏・田子倉地区を中心に―」

只見線の早期復旧応援のため、当館が収蔵する只見町の江戸・明治時代の古文書を展示し、只見川流域における山村の生活や六十里越の実態、事件・災害、伝存した書物などを紹介します。

【会期】八月七日(土)～十一月三日(水・祝)まで

「新公開史料展」

『福島県歴史資料館収蔵資料目録』第五十二集に収録された、伊達郡国見町にゆかりのある「西大枝区有文書」を展示します。

【会期】十一月二十日(土)～十二月二十七日(月)、二月二十日(日)～三月二十七日(日)

二、フィルムアーカイブズ

江戸時代の染織に関する地域史料を用いた報告のあとで、関連する記録フィルムを上映します。

【日時】二月二十七日(日) 午後一時から午後三時三十分まで

【会場】とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)小ホール

※詳細につきましては後日HPでお知らせします。

三、歴史資料館移動展

「習いの手引き―ふくしまの教育史料―」

かつて当館で開催した同名の展示を再構成し、江戸時代から大正時代にかけての福島県域で使用されていた教科書等を展示します。また、ふくしまを知る連続講座「近世の武芸から近代の体育へ」も開催(十月二十三日(土) 午後二時～三時三十分、福島県立図書館講堂にて)。

【会期】十月八日(金)～十一月三日(水・祝)まで

【会場】福島県立図書館展示コーナー

四、資料閲覧について

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、前日の午後三時までに電話での予約が必要です。詳細や最新の情報はHPでご確認願います。

福島県史料情報

第61号 令和3年10月25日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL <https://www.history.fcp.or.jp>

E-mail history@fcp.or.jp